



👁️👁️ みどころ

「マスターズ」なら松山英樹選手の活躍に期待だが、本作に登場する「マスター」はチン、キム、パクの3人、しかし、本作は「三国志」のような三者鼎立構造ではなく、シンプルに、項羽と劉邦、武田信玄VS上杉謙信のような二者間対立構造なので、その点をしっかりと・・・。

額が小さければ詐欺だが、兆単位の金額になれば詐欺ではない。そんな理屈が成立するか否かは本作を観ながらよく考えたいが、前半と後半で舞台も役割も大きく変わる2時間23分のいかにも韓国らしい犯罪エンタメ巨編は面白い。

『インファナル・アフェア』3部作と同じように、登場人物のキャラにしっかり寄り添い、骨太のストーリーを確認しながら、その騙し合いサスペンスのサマをしっかり楽しみたい。



■□■ 「マスター」なのに、なぜ3人の主人公が・・・? ■□■

本作のタイトルは『MASTER』だが、①詐欺のマスター、チン・ヒョンピル (イ・ビョンホン)、②捜査のマスター、キム・ジェミョン (カン・ドンウォン)、③ハッキングのマスター、パク・ジャングン (キム・ウビン) という3人の「マスター」が主人公だから、文法的には本来「マスターズ」と複数形にすべきもの。しかし、「マスターズ」はアメリカのゴルフの4大メジャー大会の1つとして有名だから、「マスターズ」とするとそれに間違えられる危険があるため、あえて文法を無視して、『MASTER』にしたらしい・・・?

他方、項羽と劉邦や源平合戦、さらに、宮本武蔵VS佐々木小次郎、武田信玄VS上杉

謙信等々、古今東西を問わず 2 人のライバルものは多いが、他方で「三国志」のように 3 人の対立モノも多い。3 人の場合は概ね三者が鼎立する形になるが、本作における 3 人の「マスター」たちはそうではなく、チンとキムの対立構造の中で、パクがそのどちら側につくのかという微妙な立場が焦点となる。さらに、本作で面白いのは、チンにはキム・ミヨン（チン・ギョン）という美女（？）が、キムにはシン・ジェンマ（オム・ジウォン）という美女（？）が補佐役としてついていること。

さあ、これら 3 人のマスターたち、プラス 2 人の補佐役の美女は、本作でいかなる抗争ドラマと人間ドラマを・・・？

■金融投資会社のシステムは？これは詐欺？それとも？■

本作の冒頭では、金融投資会社であるワン・ネットワークのトップに君臨するチンが大観衆の中で演説する風景が描かれる。本作はエンタメ作品として超一流だが、私が少し残念なのはチンが開拓したという金融投資会社のシステムが本作から全然わからないこと。

かつての豊田商事事件は「ペーパー商法」としてインチキだったことが明白だし、近時の旅行会社たるみくらぶ事件も、あり得ない安売り競争で墓穴を掘ったことが明らかだから、明白な詐欺事件。しかし、チンの金融投資会社の「商法」は詐欺なの？チンの「少額なら詐欺だが、兆を越す金額になれば詐欺ではない」との発言にはそれなりの説得力があるのに、そのシステムがストーリー展開の中でわかりづらいのが本作の難点だ。

したがって、ラストにキムがチンの逮捕に成功したうえ、巨額の投資資金の回収にも成功し、被害者たちにそれを配分するシーンが登場しても、弁護士の私にはそんなことはできっこないだろうとの思いが先に……。現に、豊田商事事件では当時の中坊公平破産管財人の血のにじむような努力にもかかわらず、長い間かかってやっと被害者に配当できたのはほんの数パーセントだけだったのだから。

■チンとキムの役割が前半と後半でガラリと変化！■

本作は 2 時間 23 分の長尺だが、前半と後半で舞台もチンの役割、立場もがらりと変わるので、飽きさせず面白さが続いていく。それに対応してキムの立場もがらりと変わるが、それがなぜかはあなた自身の目でしっかりと……。

もともと、チンの方は自分の意思でいかようにも自分を変えることができるが、キムの方は警察官という公の立場だから、一旦エリート的役職から外されてしまうと何の権限もなくなり、何もできなくなってしまうのでは……？当然そう思うのだが、本作では前半に大失敗をしかしたキムが、後半では「長期休暇」を利用して再びシンと組んで知略の限りを尽くすところがミソだ。イ・ビョンホンは近時『G.I. ジョー』（09年）（『シネマルーム 23』未掲載）、『マグニフィセント・セブン』（16年）（『シネマルーム 39』296頁参照）等でハリウッド俳優の一員にもなっているが、『インサイダーズ 内部者たち』

(15年)『シネマルーム37』66頁参照)等での悪役もハマっているから、本作で見せる悪役ぶりもお見事だ。

他方、カン・ドンウォンは本作ではあまりにカッコ良すぎるとの意見(批判)もあるようだが、それはそれとして、あくまでエリート警察官としてすごい能力を発揮するので、それに注目!

■□■パクはどちら側に?その選択は?■□■

本作でパク・ジャングンを演じた若いキム・ウビンを私はよく知らなかったし、そんなにハンサムとも思えないが、本作ではチンとキムの両方から信頼される(?)パクが本作のキーマンとしての役割を果たすことになる。本作では、導入部から警察への同行を要請されたパクが、チンとキムの2人から「お前だけは執行猶予にしてやる」と「司法取引」を持ちかけられることによって、チンの側に立つか、それともキムの側に立つかに揺れるシークエンスが登場する。そして、本作ではその緊張感が最後まで続くので、それに注目!

『インファナル・アフェア』3部作では、自分の意思で選んだ潜入捜査と潜入スパイのあり方がポイントになっていたが、本作ではパクは否応なくチンかキムのどちらの立場につくのかを選択せざるを得ないことになっていくので、その展開と結末に注目!

■□■元ネタとされた実話の詐欺性は?■□■

本作は建国以来最大の詐欺事件といわれる実話を基にした映画だそうだが、近時のハリウッド映画のように、冒頭に「BASED ON THE TRUE STORY」の字幕は出てこない。したがって、あくまでその事件は参考にしただけで、チョ・ウィソク監督が書いた脚本はオリジナル。そのためあって、本作は3人の「マスター」たちと2人の女性補佐役のキャラが明確であるうえ、ストーリー構成が前半も後半もしっかりしてるから、極めてわかりやすい。さらに、パクの友人役のちょっとした登場とか、エンドロール後のちょっとした裏話の紹介とかのサービス精神も満点で、実によくできている。

『007』シリーズや『ボーン』シリーズ等のハリウッド映画では激しいカーアクションが不可欠だが、それは本作でも同じ。本作は韓国的高速道路上とフィリピンのスラム街での2つド派手なカーアクションを見せてくれるので、それをしっかり楽しむことができる。

もっとも、最後に「ある結論」が明確になってしまうのは勸善懲悪が好きな韓国映画(?)らしいものの、少し残念。なぜなら、本作がネタにしたという韓国最大の詐欺事件は、豊田商事事件やてるみくらぶ事件のような単純な詐欺事件ではなく、もっと社会性のあるもののような気がするからだが、実際は意外にそれほどではなかったのかも・・・。

2017(平成29)年11月16日記